



五十嵐 靖晃 (いがらし やすあき)  
アーティスト

1978年千葉県生まれ。2005年東京藝術大学大学院修了。その土地の日常に入り込み、新たな視点と人のつながりを見いだすプロジェクトを各地で手がける。代表的なプロジェクトとして、樟の杜を舞台に千年続くアートプロジェクトを目指す福岡県太宰府天満宮での「くすかき」(2010～)や、漁師らと共に漁網を空に向かって編み上げ土地の風景をつかまえる「そらあみ」(瀬戸内国際芸術祭2013・六本木アートナイト2013)などを行う。熊本県津奈木町では海の上にある廃校を拠点にしたアートプロジェクト「赤崎水曜日郵便局」(2013～)の企画運営に携わっている。

住民参加のアートプロジェクトで人を結ぶ、感動を創る。

——まず、アーティストになられたきっかけから教えてください。

小さい頃からなりたかったわけではないんです。僕は高校三年までずっとサッカーをやっていたんですが、進路を考えると何かそれまでとは全然違うベクトルで生きたいなと思って、美術を選びました。そもそも図工とか絵を描いたりするのは好きでした。

——東京藝術大学といえば難関ですが、そこをめざした理由は何かあったんですか？

その後美術予備校に行くんですけど、デッサンとか美術をちゃんと勉強するのが初めてで。鉛筆デッサンを習ったら、それが衝撃的だったんですよ。例えばガラスのコップがモチーフとすると、それまで僕にとってコップは牛乳を飲むモノでしかなかったんですが、鉛筆デッサンをしようとする素材が何かとか、光の角度で見え方が変わるとか、ガラス越しに見える景色はどうだとか、一つのコップに今まで見えてなかった色んな姿が見えるようになって。美術に出会ってから、ものごとには色んな見方や考え方があることに気づいて、すごく衝撃的でした。

それで美術の面白さにはまって行っただけなんです。僕が浪人していたときに、藝大に先端芸術表現科というのができることになりました。予備校の先生達が「お前みたいなのが行くといいんじゃないの」と勧められて。それで、その先端芸術表現科に一期生で入学することができました。タイミングと運が良かったんです。

## 新しいアート表現を目指す藝大新設学科に学ぶ

——— 先端芸術表現科では、何を学んでいましたか？  
その中で今につながるものがあっただけでしょうか？

この学科はそれまでの藝大のスタイルとはちょっと違って、従来は彫刻科なら、まず彫り方を学び、彫れるようになってから自分の伝えたいことを作品に載せていくという考え方でした。でも、その先端芸術表現科では、まず何を伝えたいのか、どういう考えで表現をしたいのか、というコンセプトワークをやります。それから実社会に対してのリサーチをします。次に、そのテーマを最も伝えやすいメディアを選ぶ。対話なのか絵画表現なのか、または身体なのか彫刻なのか、映像なのか漫画なのか・・・という風にですね。これまでとは順番が逆なんです。その考え方に出会ったのが、まずショックでした。技術みたいなものは何にも教えてくれないんです。第一線で活躍している教官たちの現場に連れて行ってもらったり、そのスタイルを見たりとか。それから、社会に対して美術がどう機能するのかみたいな問いを考えたり。外に出て行きながら、美術って社会の役に立ってないんじゃないかと思ってね(笑)。学生時代には、結局大学って、守られた枠の中で右往左往しているだけなのかな、と見えて。それで、外にどんどん出て行くことへの欲求が強くなったんです。

伝えたいことが先、手段は後というのが、先端芸術表現科ならではのところですね。僕がいた頃はそうでした。他の学科の学生に言われるんですよ、「お前の科は何なんだよ」って。こちらも、「うーん・・・」って感じで。最初は教官が言っていることも良くわからなかったです。こうやって説明できるようになるまで、だいぶ時間がかかりましたね。



## その後の活動のベースとなった、大航海体験

——— アート活動の中で以前、4,000キロの大航海を体験されたそうですが、それはどういういきさつだったんですか？

きっかけは日比野克彦さんです。日比野さんは僕の研究室の教授で恩師なのですが、大学院を卒業するときに船に乗らないかって声を掛けていただいて。発端は2005年の水戸芸術館での日比野さんの個展です。ある日、日比野さんから電話が来て、展覧会の企画のひとつに太平洋に行く船があるけど乗らないかという話だったんです。そのときの個展のテーマが「YESTERDAY TODAY TOMORROW」といって、昨日と今日と明日のちょっとした違いに目を向けて行こうというものでした。その試みとして、人が船の上で一日また一日と日本から離れて行くと、どういう風に気持ちが変わっていくかという、要は実験ですね。僕の役目は毎日ブログを書いて太平洋上からアップすることと、一日5分間、海の上と美術館の展覧会場を生中継することでした。そうして約4ヶ月間で約4,000km、日本からミクロネシアまで行ったんですけど、その航海はすごく大きな体験でした。

一日一回、日本へ送信するんですよね。

それは太平洋の真ん中で何を、何を考えているかということを書いて送るんですか？

日々の変化を報告するんです。心のままに日記を綴るだけなんですけど、昨日の事は今日書けないんです。次の日になると感動が変わってしまう。整理されちゃうんですよね。美しくまとめたり、都合のいいように頭の中で編集したりして。そうすると感情の機微があつという間に消え去ってっちゃう。昨日見た水平線を今日は越えているはずで、昨日と今日の差はわからない。でも、心の中では何かが起きているんです。だからその時に書くことを大事にして、悪天候などで書けない時もどうしても残しておきたい感情は、心に楔を打っておくみたいなことをしていました。



それで、結局仲間とケンカになって船を降ろされちゃった…。

はい、島に降ろされました(笑)。ヨットって面白くて、島に着くまでは協力し合うんですが、着くと鬱憤が一気に吹き出しちゃう。それで、一人降ろされ二人降りみたいな感じでどんどん乗員が減っていくんですよ。結局僕も途中の島で降ろされちゃって。ヨットには、洋上のどこからでもインマルサットの衛星回線が捕まえられる装置を取りつけていました。スターウォーズのR2D2みたいな形をした機械なんですけど。それがないと日本と通信ができなくなっちゃうし、仕事ができなくなるから、苦勞してヨットから外してですね。それで、すーっとヨットが出て行って。港には、僕とリュックサックと、このR2D2だけが残ってる(笑)。

———それから、R2D2を抱えて、知らない島でどうされたんですか？

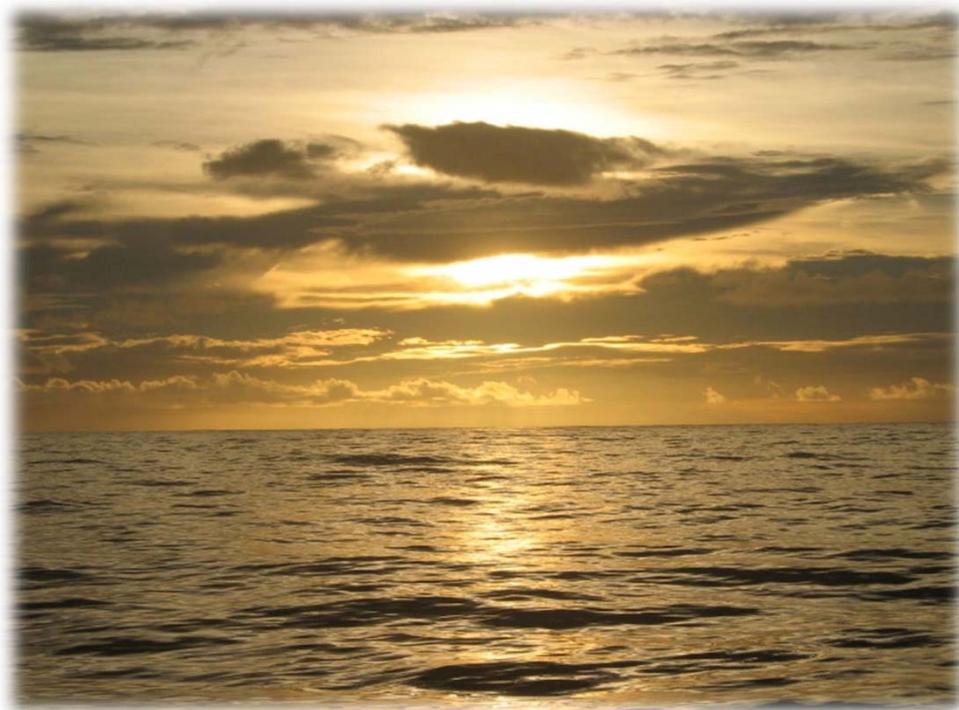
それで、まずは衛星回線を開こうと思ってバッテリーを探しに行きました。見つけたバッテリーをつないで、祈りながら起動したら、何とか回線と繋がったんです。次にカートみたいなものを見つけてきて、バッテリーとR2D2を乗っけて。それから、それをゴロゴロ引っ張りながら僕の島での暮らしが始まりました。それまでと同じように、心境の変化を綴るといふ…。

———それは、五十嵐さんが何歳のときですか？

26歳かな。2005年だったと思います。

——— 船に何日間も乗っていると、感覚の変化ってありましたか？

ありましたね。航海中は、ずーっと海と空しかないんですよ。人間の感覚って面白くて、あまりに刺激がないとどんどん感覚が開いて行って、よりアイデアや創造力が膨らむんです。だから、ちょっとした外からの刺激にも、すごく感動できる。何より感動的だったのは、ある島に近づいたときに漁師のおっちゃんが小さな船で出て来て、こっちに向かって手を振るんですよ。うれしくて手を振り返したんですけど、突然涙が止まらなくなっちゃって。僕は自分がそんな事で泣くような人間じゃないと思っていたんですけど、クルー以外の人と出会うこともなく海の上で長い時間を過ごした人間にとって、知らない人と手を振って振り返すということがすごく感動的なんです。自分はちゃんとここにいるんだって思えた。そのインパクトは強烈に残っています。それから島に着くと、女の子がみんなかわいく見えるんです(笑)。お相撲さんみたいな人ばかりなんですけどね、すごくかわいく見える。



——— 日本にはどうやって戻られたんですか？

そういう暮らしをして、飛行機で戻ってくる途中グアムを経由したんですけど、グアムの街中に突然南の島や海の上で暮らしていたほぼ素っ裸のような精神状態で入っていったから、刺激が強すぎて。ショッピング街なんて恐ろしくて歩けない。日本人もたくさん買物に来てるんですけど、僕には「この人たち、いったい何してるんだろう」と思えて。買物をしていることはわかってるんですけど、すごくおかしなことをしているように見えてしまって。きれいな服を着てるし何も困ってないのに、また買ってる。ついさっきまで島や海にいた僕の目には、みんなが何か錯覚させられて、生産と消費の世界の渦の中に生かされてるように見えてしまうんです。その時に「この人たちは不思議なことをしてるなー」と思ったことは、今の活動のベースにもなっているんです。



——— それは長い間海の上において、空と海しか見ていなかったから今の文明生活に対する不思議さを感じたわけですね。

それこそ、レトルト食品と生鮮食品を食べた時の身体の喜び具合の違いがすごくわかったり、ひとつひとつのことがすごくシンプルに体感できるようになっていました。それに、現代の発達した文明社会や人の暮らしぶりが非常にこっけいに見えたんです。生まれて死ぬことは決まっています、その間に何をするかという中で、もっと豊かで楽しいコトっていろいろあるのにね、と思った。かなり世間離れしてますからね、その時は。でも結局は、帰国して一週間もしないうちに文明生活に慣れちゃって、元に戻っちゃう。

——— その体験は、今の五十嵐さんの活動や生き方に大きな影響を与えていますか？

大きいですね。自分の育った所をあれだけ遠くから眺めて考えられたのは、すごく大きかった。自分の中のものさしの幅が、バンって広がった感じ。美術に出会ったときと同じくらいの衝撃がありましたね。

## 出会いをつくって心を動かす、アートプロジェクト

———今の代表的な活動と、五十嵐さんが感じている面白さを教えてください。

単純に言うと、いろんなコミュニケーションの方法で、相手の心を叩くということです。そうすると眠っているものが出てくる。お宝発見みたいに、普通に暮らしていると出会えない、出会っているけど普段は触れられないような部分がある、例えば漁網を編んでる時間とか、葉っぱを掃いている時間に出てきて、見えてくる面白さがありますね。

———「そらあみ」はスタートして何年になりますか？

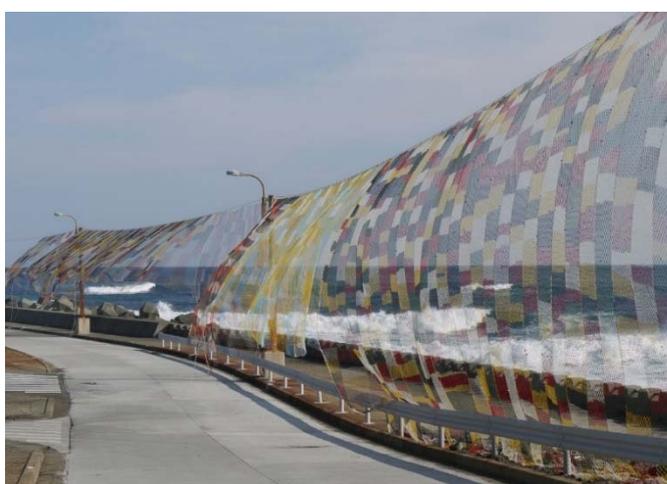
そらあみは2011年からなので、4年ですね。

「そらあみ」とは

参加者と共に空に向かって漁網を編むことで、人をつなぎ、記憶をつなぎ、完成した網の目を通して土地の風景を捉え直すプロジェクトです。古代から営まれてきた漁網を「編む」という共同作業の中に、過去から未来へ引き継がれる縦軸(時間軸)と、海を越えてつながっていく横軸(空間軸)のふたつの方向性を持って“コミュニティをつなぐ所作”としての可能性を考えます。詳しくは <http://blog.igayasu.com/2014/6/01>

———「そらあみ」を始められたきっかけは？

東京都の仕事で三宅島へ行ったとき、偶然漁師さんが網を編んでいるのを見たんです。恥ずかしい話ですけど、網って人が編めるんだと驚きました。まさに感動しましたね。それで漁師さんの船小屋に一週間通って網の編み方を習ったんです。朝から晩まで編み方を教えてもらったんですけど、ずっと編んでいるとだんだん独特の感覚になってくるんですよ。雨や風の音とか鳥の声を聞きながら、世界がゆっくりと動いていって。糸が指に触れる時の刺激とか、座って編んでいる時のポーズとかを意識すると、この行為はちょっとやばいなと思って(笑)。漁師の爺ちゃんたちの話だと、昔は村人や家族が浜辺で並んで網を編んでいたそうです。それを聞いた時に「あ、その風景を見てみたい」と興味が沸きました。それから、網は人を寄せるとも聞きました。編んでいると誰かがお茶を持ってきたり、ワイワイ参加してくるような、人を寄せる力があるらしい。網を編むということ自体、魚を獲るという目的だけじゃなくて、コミュニケーションのツールとしても機能してたんじゃないかと思えて、そういう部分の可能性に強く惹かれました。それで、一回実験でやってみたんですよ。京都の舞鶴で、ロープを一本引いて、20人くらいで編んでみた。そうすると、大人がくっつき合って編んだり、子供が糸巻きしてたり、ばあちゃんと子供と一緒に編み針に糸を仕込んでたり。いきなりそこが漁村になっていくような雰囲気ややっぱり感じられたんです。始めはロープを一本、テントの柱と柱に張ったんですけど、編み進むとどんどん下に伸びて行って、暖簾みたいにゆらゆら揺れ始めた。「これは、ずっと上から下げたらすごいな」ってイメージが沸いたので、早速大工さんに相談したら次の日、上に滑車のついた10メートルの竹が4本立った。それで、編みながらどんどん上にあがって行くという展開ができていったんです。これが、そらあみの成り立ちです。



——「くすかき」は5年ですか。4~5年やっていると、何か変化はありますか？

「くすかき」は太宰府天満宮でやってるんですけど、季節の風物詩として地域の中に定着しつつあり、だんだん再会の場になってきています。「そらあみ」は海の向こうでも編み方は同じなので、日本からどんどん世界に向かっていますが、「くすかき」はプロジェクトの性格上、その土地に深く入っていく感じです。ふたつのプロジェクトが、違うベクトルで動いている。まったく知らない人たちに出会う「そらあみ」と、関係性を深めていく「くすかき」。恋人と嫁さんみたいな違いですかね(笑)。

#### 「くすかき」とは

太宰府天満宮の境内で、参加者と共に樟の落ち葉を掻いて、日々刻々と変化していく春の樟と向き合うプロジェクト。この地で千年続く落ち葉掻きを通じて、かつてここに存在した千年樟の姿を描き出します。土地や土地の人たちとの繋がりを時間をかけて紡ぎ、樟のように緩やかに成長し、変化をとげていくことをめざしています。

詳しくは <http://igayasu.com/kusukaki/top.html>



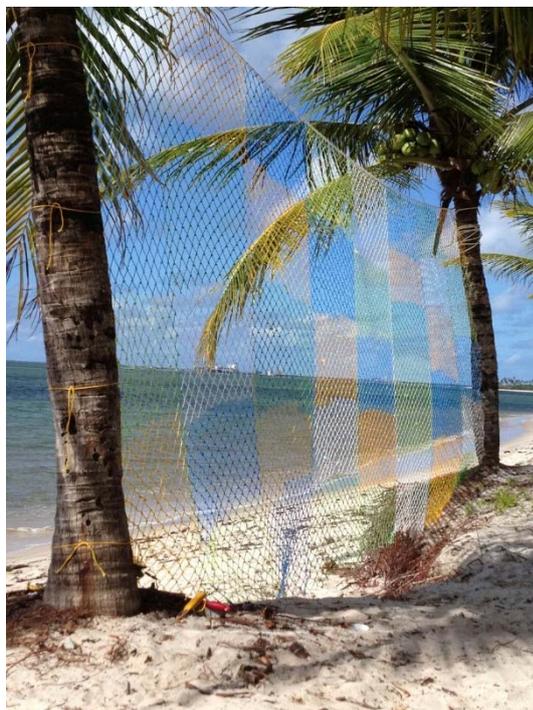
## ブラジルの空に掲げた「そらあみ」

—— 2014FIFAワールドカップの開催時にはブラジルへ行って「そらあみ」をされましたけど、そのいきさつと向こうでの様子を聞かせてください。

僕が色々な地域でやってきたアートプロジェクトと呼ばれる活動は、ここ10年くらいで国内ではだいぶ知られるようになってきました。越後妻有の大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭など、有名なものもあります。土地の風土や魅力を、アートを介して再認識させようという動きがだいぶ定着してきました。行政機関や企業の方に対してアートプロジェクトやワークショップと言っても、以前のように相手が「ん？」となることはなくなりましたね。でも僕の中では今、これまでとは違う新しい刺激も欲しいなという思いがあるんですよ。いろんな所でプロジェクトをやらせてもらって、もちろん面白いんですけど、あの海に出た時のような若かった頃の刺激というか、何かこう「本当に出来るの？」みたいなことで、もう一回自分を晒してみたいと思ったんです。それで、地球の裏側の言葉も通じない国に行って、自分のスタイルややり方を、土地への入り方・プロジェクトの起こし方も含めて、通用するかしないか知りたかったというのが一番の動機でした。

—— 現地の人の反応はどうでしたか？

想定外の面白さといえば、「そらあみ」が出来あがったときに、一緒に作っていた漁師さんがいきなり「これは世界の真実を見せてくれるんだね」と言ったんですよ。「そらあみ」は、背景が青空なら水色で編まれた部分は透明に見えたり、赤い部分は飛び出して見えたりします。風景が透過したり飛び出したり、普段見えているものと変わっていく視覚の効果が生まれるんです。それを指して、アートだ何だとか云々言わない漁師さんがそう言った。これは衝撃で、うれしかったですね。だいたい、漁師さんのように空や海と日々向き合っている人たちは、感性がすごく鋭くて、とても骨太な反応が返ってくる。それは日本国内のプロジェクトでもあったけど、ブラジルはもっと純粹でした。作品に対する反応もエッジがあるしビビットな感じで、面白かったですね。

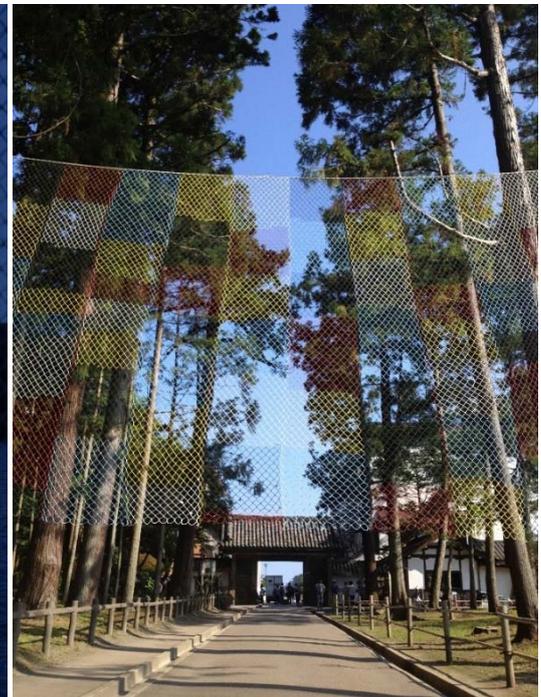


—— 今回の五十嵐さんのブログを読んでいて、日本とブラジルを比べると、  
片や成熟して、片や発展途上の国だから、  
人種じゃなくて社会の違いから来る感じ方の違いがあるのかなと思いました。

そうですね。一昔前の日本も、社会が乱暴で厳しくて、だからそこでサバイブしていくような強さがあったと思う  
んですよね。ブラジルはまさに今、すごい格差があって、肌の色も白から黒まで全部いますからね。その幅の中  
でみんながサバイブして生きている。自由や豊かさを獲得するために、コミュニティや家族をすごく大切にする  
し、生きることへのエネルギーが溢れています。自分で自分の生きる場所を獲得して行く逞しさを感じますよね  
。僕が育った日本はすでにとても整っていて、それを掴み取らないといけなく切迫感はありません。でも日本人  
も本来ならもっとそういう意識を持つべきだし、豊かさや幸せって一体何なのかということも考えなきゃいけない  
。これってとても大切なことだと思うんです。

—— 直近の活動には、どんなものがありますか？

東北の松島で「そらあみ」をしたんですよ。伊達政宗の菩提寺である瑞巖寺は、参道が中秋の名月が出る位  
置に向けて配置されているんです。これは面白いなと思ってね。それで僕なりに解釈したんですけど、政宗公  
が残したかったのは、松島の穏やかな海を極楽浄土と見る、霊場松島としての視点なんじゃないかと。今は観  
光名所ですが、実は祈りの地で、この世とあの世を意識したりする場所だった。それがお月様に対する意識だ  
ったと考えたんですよ。明日はちょうど満月で、参道に月が出てくるんです。そこで参道に「そらあみ」をかけて  
ライトアップして眺めるというのをやります。地元の人に打ってもらった蕎麦と松島湾で獲れたあなごを食べなが  
ら。瑞巖寺のお坊さんにそんなことをやりたいと話したら、正宗公の視点と重ねるのなら、瑞巖時は今平成の  
大改修中なので、それが完成するときにに向けて皆で「そらあみ」を作っていく手もありますねって言ってくださいま  
した。それも面白いと思って、今回はそのキックオフみたいなイメージでやれたらと考えています。



## 受け手の変化に立ち会う面白さは、まさに感動的

———アーティストとして今の活動の中で、大事にしていること、こだわっていることは何ですか？

現場に入っていくときは、その土地やそこで出会う人たちと素直に向き合うことを大切にしています。あとは、ワークショップにしてもレクチャー講座みたいにはしたくないなと思っています。昔は、場がゆるくなっちゃうのは耐えられなかったんです。「みんな！ちゃんと前に進むぞ」とか「こっちに行くぞ！」って感じてやっていたんですけど、だんだん空間を構成する面白さというのは、場を設定する人の“器の広さ”や“ものさしの幅”に左右されると思うようになって。ちょっと見学に来た人とか、たまたま近くに座っている人もその場を構成しているわけだし、たとえ寝ている人がいてもそれくらいありなんだと思った方が面白いし、それこそもっと感動に近づけるような気がします。

———今まで活動されてきた中で、五十嵐さんを感動させたエピソードを聞かせてください。

プロジェクトの活動では、出会った人の変化に立ち会ったときに感動します。出し手と受け手の関係性の中に表現があって、両者の間に起きていることに立ち会えるのが、コミュニケーションをベースにした活動の一番面白い部分なんです。例えばテレビ制作者は視聴者が何かを感じている場面に立ち会えないし、絵を描いていてもそれは難しいでしょう。作品はあっても作家はそこにはいませんからね。僕みたいなタイプは自分もそこにおいて、「くすかき」を例に言えば、小学生が毎朝6時半に葉っぱを掃きに来てくれて、ひと春を介してその子がすごく成長していく姿に出会えたりする。一本の映画じゃないですけど、プロジェクトを介して運動体が成長したり、個々の視点や意志が変わっていくのに立ち会える面白さがあります。これは、やっぱり感動的ですよ。

———アートで地域の人々をつなげるという中で、今後その意味や可能性をどういう風に活かして行こうと思えますか？

色んな地方へ行きながら感じるのは、何か新しい価値観に向かって動き始めている若い世代が増えているということですね。私たちの国日本が誇るべき文化や価値観をもう一度捉え直して、自分たちでブラッシュアップして、さらに「世界に発信して行け！」みたいな情熱を持った人が増えている。そういう人たちの姿を見ると、すごく可能性を感じますし、僕もあっちこっちへ出かけて、もっと刺激して行きたいと思っています。



これからの活動にむけて、抱負や夢をお聞かせてください。

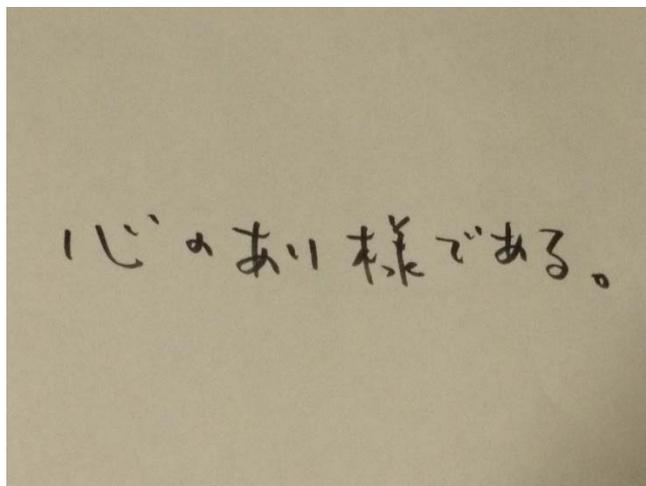
僕が今やっているコミュニティをベースとしたアートプロジェクト活動は、日本で独自に進化してきたものだと思うんです。それをどんどん海外へ輸出して、世界に展開して行きたいという欲求はありますね。通用するかしないか、意味があるのかないのかも含めて。日本だから意味があるのかもしれないですね。

——— 最後に、五十嵐さんにとって感動したり  
感性を豊かにするために必要なものとは何でしょう？

柔軟に物を見ることだと思っています。生まれる時代は選べないし、生まれる場所も選べない。でもどういう視点でこの世界と向き合うかだけで、豊かさが全然違ってきます。だから幸せになれる人はずっと幸せだし、不幸だと感じている人はずっと不幸だと思うんですよ。お金があろうがなかろうが、腹が減っていようと満たされていようと、幸せな人は幸せだし、不幸な人は不幸なんです。そこは物の見方や感じ方でしかなくて。その視点の柔軟さ、多様性みたいなものを持っていけるかどうか、一番面白いところなんです。あと何よりも大切なものは感動を共有する家族や友人や仲間存在です。



感動とは・・・



---

## インタビュー後記

モノ・コトを創り、出会う人と人を繋ぎ、人と地域・街を繋ぐ五十嵐氏はアーティストであると同時にプロジェクトに関わる全ての人を束ねるプロデューサーとして活動されている方だと思います。「くすかきの活動に現在参加している子供達が大人になる頃には活動から地元の御祭りになっていると思います」・・・と彼が思いを馳せるのは「そらあみ」も同じ感慨なのでしょう。次にそらあみが捕らえるのはどこの人々と景色、空間なのか、また今後新たなプロジェクトが数々創られ、関わる人を感動体験へと導いてくれることを期待しています。